

2015年

パキスタン カラコルム・シスパーレ

バトカーラ・ベース 巡り

6/08~6/28



海老原 道夫

この6月パキスタン、フンザの「朝霧」には思い出深いウルタルとグループを共にしその西北に位置するシスパーレ(7610m)とバトゥーラ(7785m)のベースに登る旅をした。6月の8日何時ものPK(PIA)機で成田を発ち珍しくイスラマバード経由ギルギットまで順調に飛行機で移動する事が出来てこれはつき過ぎて味が悪いやと思っているとさすがにパキスタン、いつも割りと律儀なガイドの「シャー」が迎えに来ていない。今やタリバーンが大活躍している山の空港でいかにも金持ちそうな大荷物を抱えた爺さんが一人ポツンかよ。誘拐されちゃうじゃないかよ、だ。スツタモンダあっても結局、夕方には今回のベースホテルであるフンザのヒルトップホテルにたどり着いたが、これだけでもかなりな物語になる事件だった。

1日おいて6月10日ジープで先ずシスパーレに向かって出発。ルートはウルタルからシスパーレ方面に連なる山稜の左側(南側)の谷に入り、ジープの性能を最大限に発揮してスイッチバック等を繰り返し藪道を登り岩の斜面に這い登り、ついどうにもなくなるとスタックした所で付近の岩陰から、ばかに都合よく頑丈そうな男達が現れてジープを押し始めた。はじめはジープ押しの手助けかと思ったがそうではなく、彼らは私達の隊のポーター達だった。つまり朝早くからジープの限界点まで登って待っていたわけだ。ジープは彼らに向きを変えてもらってバイバイ。この辺の連携は今やモバイルの性能がよく、かなりの山の中でも楽になっているのだ。

そこからキャラバン開始。ランチをはさんで3ピッチほどで広い河原の登りで途中には下の街のアリアバードまでの水道用の工事現場があり50cm×7m位の硬質ゴムのパイプを地中に埋め込んだりしてあり、「この材料は、ヘリで？」と聞くと、何とショルダーだと。とにかく登ろう。左の狭い谷に入ると雰囲気は一変した。両サイドの壁も正面への傾斜もぐんぐん激しくなり特に右側の側壁は特別にすごくなってきて一ノ倉沢の烏帽子の奥壁の下をトラバースしているような気分でありその長いこと長いこと、アリアバードからジープを交えて高度もかなりあげているので、どうやら高度の影響も効いてきているし私の潜在能力だってイッパイイッパイなのにとてもキャンプ出来そうな雰囲気はみえなく、谷の二股を右折するあたりで会った二人のパーティーにも、ろくに眼もむけられなかった。(今回の山行では登山者と会ったのはこの二人だけだったが。)谷の二股を右に入ると傾斜は少

しゆるくはならないのだが谷が少しずつ広くなりキャンプ地の気配が感じられるようになり苦しくても気分は楽になりとにかく腰を下ろし行動食、水を取ることが出来、「シャー」に八つ当たりするゆとりもできた。

結局この日は9時間登りっぱなしでキャンプを設置できた。

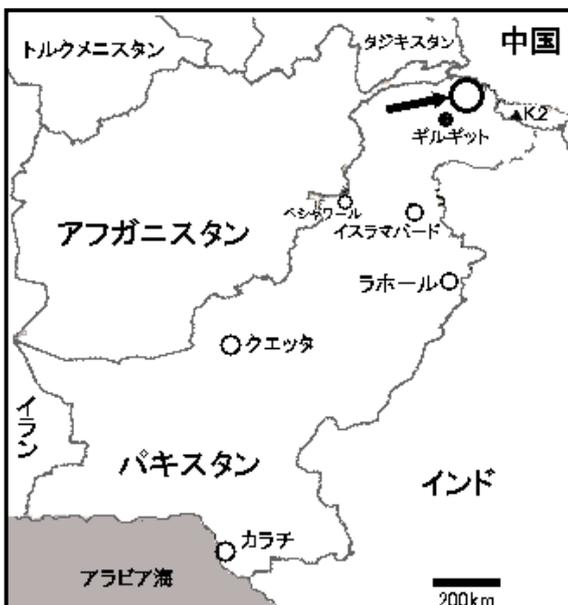
考えて見れば、アプローチが大変なのは当たり前でいくら下の方でジープを使ったとは云っても街からスタートしていきなり7600mクラスの山のベース近くまで登ったのだから多分今日は1000m以上高度を上げたに違いない。そんなことは出発前にだって気がついて当たり前なのだが先に気が付きすぎてストレスにまいったりしないのが私の強みとも云えるが、それにしても初日にこれはきつかった。そのくせ初日の夜はいつも着こみ過ぎて暑い思いがあるので大した防寒もしないでシュラフに潜り込んで寝てしまったら朝方水漬(はな)で目が覚めた。爺さん死ぬぜ。

6月12日、前夜の打ち合わせでガイドの「シャー」によれば次のキャンプまでは7時間もかかると言うのでそれでは私では10時間以上もかかってしまいそうで先行するポーター達との連携が大変で危険なので(もうここまで登るとモバイルは効かない)取り合えず今日は、私とシャーとで上部の様子を見きわめることとしてポーター達には停滞してもらって出発した。ルートは大きな岩棚が積み重なるような感じで、上部への見通しはなかなか効かず辛抱強く身体を引き上げて行くのみだが昨日と違うのは両サイドからの落石等の脅威がないのでずいぶん気分は楽な事だ。ゼイゼイ言いながらも気持はのんびりと高度を上げ3時間程も登ったあたりでこの谷のモレーン状と言うか尾根状を登っている事となっている辺りでこれ結構、中間キャンプ地になるんじゃないかなと、考えた。水が取れればまあまあオッケイじゃないかなあ。とシャーに問うとバカにハッキリと、そしてやや慌て気味にポーター達を連れて来るので、ここで2時間待っていて下さいと言う。もともと私が言い出した事なんだから、もちろんだ、2時間なんてあわてるなゆっくりで良いさと言いつつ彼らは走るように下って行った。

多分、シャーはタベは、この場所を忘れていたのだと思う。だから、急に無口になり、やたれにあわてたのだ。多分、少し雨が降り出し、冷えてきた中、ゴワテックス合羽を着込みフンザのドライフルーツをなるべくゆっくりと噛みながら時間を過ごしたがまるでビバークしているみたいな感じで時間を過ごしているとほぼ2時間でシャーがまたやせ細った感じで息を切らせて登ってきてその少し後からコックがかなりの荷を背負って登って来た。それにしても化け物かこの人達はいくらゆっくりでも3時間かけて登って来た所へ往復2時間で戻ってくるとはまさかと思うよ。でもやっぱり早く戻って来てくれて有り難かった。

余裕はかましていたけれどポチポチ身体が固まりかけていた処だった。そんな訳でその日はそこでテントを張って2番目のキャンプとなった。ポーターの1人がカゼを引いたとかで、薬を欲しいと言って来た。もちろん説明付で渡したけれど良かった、化け物ばかりの集団ではなく可愛げがあった。夕刻、雲の合間にシスパーレがみえた。かなりシャープな姿でK2によく似ている姿がきれいだったが太陽を背にしているのでモノトーンで何となくスケールがつかめずに残念だった。明日は根元まで登れるのでじっくりと観察できるに違いない。

翌朝、今日ははっきりとポーター達はレストとし、シャーと2人だけでシスパーレのベースに登り腰を据えて付近を観察させてもらおうと張り切って出発。





シスパレ(Shispare)7610m

天気は相変わらずでこぶの上に出る度に懸命に主峰とそのまわりの氷河の方向やらを確認しようとするのだがどうしても雲が低くてじれったい。キャンプから1時間半ぐらい登ったあたりで大きなガレが右の稜線に向かって上がっていて、それはレディスヒンガーピークへのルートだと言うがウルタル主峰にかなり近いそのピークへのアプローチがこんな方からなのかとかなり以外だった。そのガレの上部からおそろしく冷たい強風が吹き下りてきて一瞬で体温を奪われて大慌てでゴワテックス合羽を身体に巻きつけるようにして這うようにしてガレから抜け出したんだかバカにして一発食らったような気がした。そうこうする内に明らかにここがベースだと言える安定した小広い台地に降り着いた。ここなら目の前に聳えるシスパレの根元からトップまで一望の元だ。雲がなければだ。K2によく似た姿だと遠望したがオマエもか。それこそ雲の間にほんの少しずつ何かが見えるのだ。頂上はどの辺りかもはっきりしなければ、目の前の氷河のスタートも方向も分からない。やたらシャッターを切ってもみんなキレツバシばかりで全然駄目だ。ウンザリしているとポーターが一人登ってきた。

近頃はポーター気質も変わってきて彼は好奇心一杯でやっぱり山を見たいし登りたいのだ。シャーの提案で彼にカメラを預けて臨時カメラマンとして私達はキャンプに降りることとした。彼は夕方まで頑張った。またそれを知ったもう二人の若いポーターが合流したが結果は変わらず風邪薬が余分に減る事になった。

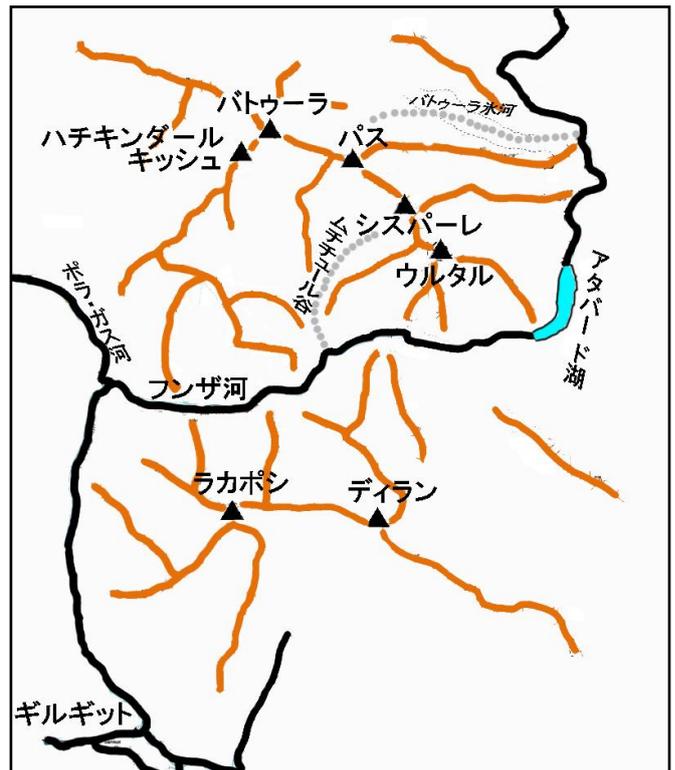
翌朝未練は残るけど次の予定もあり下山にかからざるを得ず、5時半には下に向いて動き出した。下山ルートは少しの間は足元の安定した尾根状というがモレーン状というか歩きやすかったが例の岩壁群の裾のガレのへずりの地帯に入ると下山しているというような安易な気持が消し飛ぶような緊張した動きが強いられ、フウフウ言いながらふと振り返ると何と昨日あんな姿を隠していたシスパレがほぼ全身を見せて我々を見送っているではないか。とても登攀ルートを云々するレベルではないが兎に角(とにかく)カメラにはおさめさせてもらえた。K2の時のように自分に写真は無しというような悲しい事にはならずすんだ。更に谷の出口近くまで下りると私が10年ほど前に登頂したミルシカルが正面にたっているのに対面した。ホテルでは毎日横向きのサエナイ姿をみていたがこちらから見ればなかなか立派なものだ。今日の下りのくせにずいぶん転がり落ちたり踏ん張りさせられたりしたが、好い気持ちにさせてもらった。

広い河原に出てランチタイムとして、ポーター達にもチップを配ったり(バトゥーラのポーターは別チームとなる)ポツポツ解散への準備をして、更に2ピッチ程でジープと合流、テルへと戻ってシスパレ行きは終了した。

今回はモノクロ爺さんの私も随分進歩したのだぞー。何しろ自分でセットして携帯で自宅に電話する事が出来たんだ。もっとも下準備は娘がやってくれたんだけど。

今回は忙しい旅だ。ホテルに一泊しただけで今日6月15日はもうバトゥーラに向かって出発だ。今日はフンザ河をそのままさかのぼったパスー村のホテルへ移動するだけなのだが、ジープに乗ってすんなり行ける訳では無く、数年前に起こった地震による崖崩れでフンザ河がせき止められ大きな湖が出現してしまいカラコルムハイウェイはすっかり水没してしまったのだ。上部へ向かう旅客はその岸で船に乗り換えて上流の岸でもう一度、車に乗り換え上へ目指さなければならない訳で私達のように登山用の大荷物を持った人間にとっては大変な移動ということになる訳で以前だったら2時間程度のドライブで済んだ小移動が荷物積み替え付きの1日移動がかりとなった上にこの地区はイスラム過激派のタリバンの動きが活発となり外国の客は激減しているのだ。それを十分承知しているのにへそ曲がりの爺さんはここを登って行こうとしているのだ。

ホテルから小一時間でグルミット村の上部のアタバード湖(と名付けられている)の船着場に着くとすぐ接岸していた船にジープに満載の荷を積み込み(多分予約はしていないだろうけど)受付の事務所らしい物もないし仕切っている人も分かんないのに勝手にして良いのかなと心配なほどだった。船は長さ15m、幅3.5mほどで中央に頑丈な板が1.5mの間隔で2本、横向きに出っ張らしてありそれを渡って乗船したりして客はその板の前後に40人位乗っていて大体満杯だった。そして笑っちゃうのは例の横板にバイクを2人がかり乗っけて来て出発だ。私も船の操縦免許を持っているので興味津々だ。バイクはとにかく近くのもう少し大きい船の駆動に利用しているのだらうと思っていたが後日聞いたら立派な積み荷だったのだついでにここで稼働している船どうやって運んで来たのだと問うとトラックだそう。あの曲がりくねったカラコルムハイウェイを含んで海から、4年程前の大地震のダメージは凄しい、そこで生活する人々のたくましさ、共に凄味を感じさせられる光景だ。とにかく出来上がった湖



は幅400mで長さ5km位だろうと思われた。そして途中3ヶ所ほどほんとに簡易な船着場があり、すごく着飾った若いお嬢さんが途中下船して普通にサンダル履きのまま崖を登って我が家(多分)に帰る風景にはもう大異変に対応した生活力の凄さを痛感した。お互い自然災害の多い国で生活する人間同士、少しでも相手の助けになる行動をすべし、貧乏爺さんはこの地で山に向かって無駄な力を振り絞り自己満足にひたり、その対価を使わせてもらえばいくらでも役に立たせてもらえると思えばいい事とする。

そんな訳で約1時間の船旅を終え、更に1時間弱のドライブをすればパスー村の北はずれに位置するのだろうかカラコルムハイウェイに沿った小綺麗なホテルに到着した。ロビー兼レストランの中央には宮森さん作成の付近の山地図が張ってあり、それを懸命に参考にしようとする自分との差にかなり恥ずかしくなった。元はと言えば宮森さんは昔からのヒマラヤの記録をまとめ立派な本にまとめ上げた功労者でありその一部に駄文を報告した事もある私が自信の無い眼で氏の作成のルート図に見入るとは勉強家とナマケ者の差はあまりにもはげしかった。

結局は特に新しい情報はなかった。明日からはこの庭からハイウェイを背に見て西へ大きな谷をほぼ一直線に5日ほどでバトゥラのベースへと向かう。

6月16日1km弱の平地を横切り、大きな谷の押し出しの150m位の崖を這い上がる。こういう予告を感じられる登りはカラコルムでは比較的タチが良い方だ。よそでは何時も不意打ちの崖が多く心の準備を整える間もなく這い上がるので大いにダメージを受けたが今回はずっと前から準備OKだった。この谷は広い谷なので側壁からの落石等に脅かされる事は無くただ正面の傾斜に立ち向かえば良いので神経はのんびり出来る。

4時間程登ったところでゲートがあり(何の役に立つのか不明だが、もちろん害獣除けにもならない)ユンバンという所でランチ兼今日のキャンプ地との事だがポーター達の初日のアイドリングとしてもいかにも短か過ぎるし明日の氷河の横断を考えれば今日はもっと延ばせるものなら伸ばした方が良いよ。と私が珍しく言った。何と云ってもまだ昼前だ。シャーとポーター頭(誰だか分からないが)結構長い話をしてもう少し今日の行動を伸ばすことにした。それから2時間程、右手に氷河のモレーンらしき小尾根に視界をふさがれながらそれなりの苦しさを感じながら登るとやや小広い台地に着き、自然と今日のキャンプ地となった。

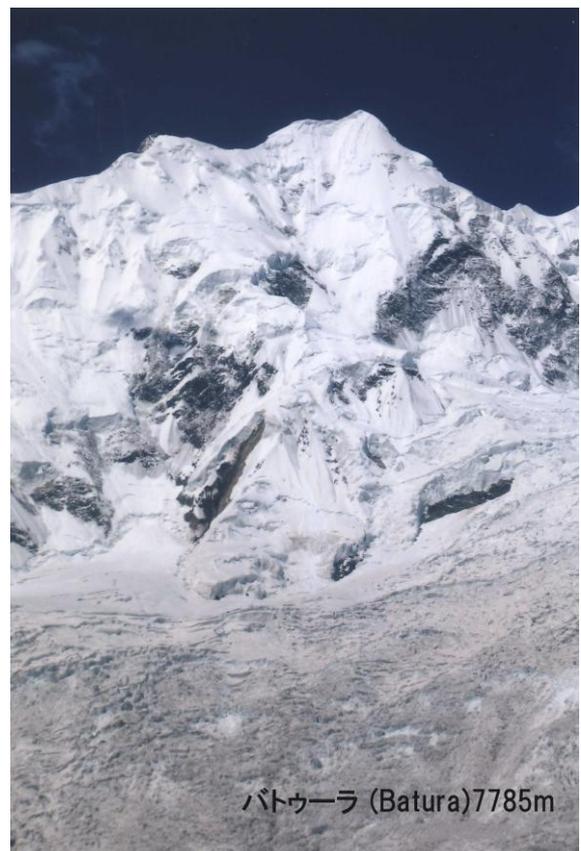
私はもうポーター達に無理は言えないがやはり氷河をちゃんと見ておきたくてそこから少し登ってモレーンのコル状の所まで出て明日、横断しそうな氷河の位置を眺めた。シャーは「チョロイものダ」てな調子だが私には氷頭が連なる様子から小さなアップダウンは多いしルートファインディングだって大変だろうとかなりの時間がかかりそうな予感がした。(ポーター達が氷の上でキャンプするならなんでも無いが、それは絶対ない)まあ、今日の処は仕方ないが、明日は出来るだけ早く氷河の横断似かかるルートを選んで欲しいものだ。

6月17日、今回の山行の最悪の1日が始まった。もちろん朝から、それほどの事になるとは思って居なかったが、要は氷河を右に見ながらいつまでも左の山稜の痩せた腹を登り過ぎたのだ。氷河の下降点近くで少々早すぎるランチをしたりしていいよ氷河のトラバースを開始したが技術的には特に問題はないのだが兎に角、進む方向性が安定しない。氷河

なんだからそんな事は当たり前なのだがそれにしても右往左往し過ぎだった。

今までバルトロ氷河のような大きい氷河でもディランへの氷河でもこんなにジタバタしたことは無い、対岸の山腹ははっきり見えているのに氷塔を右から越したり左から越したり小さな谷へ下りたり登ったりでサッパリ近づく様子がないしやや先行していたポーター達の姿も見なくなった。どうやら隊はバラけ気味で進んでいるらしく、1人発見。シャーが氷塔も上から急に怒鳴りだし前方に向かいルートの指示をさせた。見れば大きな荷を背負ったポーターが1人、谷底で右往左往している。これは明らかに仲間からはぐれたのだ。彼らは着替えも予備食もほとんど持っていないのでビバークにでも追い込まれたら私がそうだったより大ごとになってしまうかも知れない。これはもう私の後ろにピツタリくっつけさせる。それから2ピッチほどで兎に角、対岸のトレースにのれた。氷河に入ってから6時間もかかってしまって、もう夕暮れになってきていた。安心してキジ打ちに行ったシャーに内緒で迷子のポーター君に日本から持って行っている黒飴をやってカンパイをしようと思えば「オレはこれだ！」などとタバコなんて吸ってる。だからバテテ、オイテカレちゃうんだ。タワケ者。

そんなこんなでバトゥラの主峰を正面に見る草原の台地のキャンプ地に辿り着いたのは夕暮れの7時となってしまっていた。今日は13時間も行動になってしまった。これはいつもそうなのだが、朝、動き出して離れてしまうと、ガイドとポーター間の連絡が着かなくなり、行動を途中で縮めることも出来なくなったり迷子のポーターがでたり結構危ない場面が出てしまうのだ。夕食後、ポーターの中で腹痛、下しが出たので、薬をとの頼みがでたので、多分あの迷子が神経性胃炎だなど察してそれなりの薬を切り分け時間、量等の注意付で渡したがその様子を見ていたサブコックが何を勘違いしたのか急に私にたいする態度が上がりもうなんでもしませうと言う具合になってしまった。まあ僕も勉強しよう。なんて



バトゥーラ (Batura) 7785m

考えてくれればそれでもよい事なのでほおって置くことにした。明日は当たり前前に休養日と成らざるを得ない。こままで無理をしてしまうと頑張りは何の徳にもならないし悪くすればこの山行が危なくパーになる程の危険性を含んでいたのだ。今回のシャーはあきらかに出来が悪い。幸いにも天気にも恵まれていたので1日のロスで済んだのはむしろツイていた。おかげで翌日1日中ウンザリするほどバトゥーラの東面と睨めっこ出来た。頂上への登攀ルートについてはこれから行こうとするベースがうんと右側から回り込むようになっているのでそうなのだろうが、現在のクライマーならここから見える範囲のルートを選ぼうとするのが自然のような気がするのだ。

6月19日、本来のナジール事務所の案内のベース方面に向かって出発。ルートは広い河原を大きく右に迂回するように進み、300頭くらいの羊の通過に巻き込まれながら一昨日は君達のトレースに乗れた本当にホットしたんだぜアリガトヨ。と内心、感謝したりした。そしてルートはランチタイムあたりから段々とバトゥーラの東面の壁からはずれだし右(北)側の平坦な谷に入り込んで行き、景色がつまなくなっていた。この傾向はキャンプ地に着くまでとうとう変わらず、珍しく大きなピークがまるで見えない一夜を過ごす事になった。

明日はシャーと私だけ早起きして何時間か進み上部を眺めてUターンして朝から昨日のキャンプ地に降りるポーター達の後を追うアイデアもあったのだが、夕食のミーティングの時「まだ先もつままないのかな～」と問うとどうもそうらしいので、もう朝から全員ともに下山似かかかる事になった。シャーには下山時のジープのキャッチとか船の段取り等がかなりプレッシャーらしいのだ。「こんなに、下りて直ぐにジープをキャッチは出来やしないよ」などと事務所で作った予定表を見ながらブツクサ言っている。

確かに案内文を書いているマネージャーのスターン自信は現地に来る事は先ず無いし、山を登る事は全くないのだから現地の状態と合わない記述もかなり有る事は今までも何回も有ったのだ。私は大体はパキスタン、タイムだからとタカを括っている面も有るけど交通機関とかホテルの予約とか、からんでくるとそんな呑気な事も言っていられないのでシャーがゆとりをもって山を降りたい気持ちは十分理解できるので大した変化もない部分を少しばかり登ったところで仕方ないので清く下山する事にしたのだ。

この日は例のきれいな草原、ウズボクボルトに降りた。草原の入り口の石の上で花の様に座った若い羊飼いの女性から思いがけなく声をかけられ何となく察して「うん、上から来た」と調子を合わせると、シャーが「疲れた・・・」と言っているんだよとわざわざ通訳した。中身なんてどうでも良くて要はフンザの奥の女性はこんなにおおらかに旅人に声をかけてくれるんだよ。これが変に宗教に凝り固まらない自然な人間の会話なんだ。

3時頃、バトゥーラに入ってから初めての雷雲が発生して風と雨が襲ってきてテントがハタメキ、羊たちが全力で付近を駆け抜けて行く何頭かが張り網を蹴飛ばして行く。牛でなくてよかった。殺されちゃう。

嵐はまもなく過ぎて羊も草を食みながら戻って行き、夜は凄くきれいな月がでた。私のポロカメラでもキャッチ出来たほどだ。でもレンズの汚れまでキャッチして残念。そして夜中にまたかなりの雨が降り、とうとう天気も変わり目になってきたようだった。油断していたのでパスポートやら元々よれ

よれのルピー紙幣やら乾かすのに忙しい思いをした。一応は人目を忍ぶ作業ではあるんだから。

翌6月21日はピーカンで明け、下山にかかった。カラコルムハイウェーまでは実働2日なのだが2日目の夜をホテルで過ごす和金もかかるしポーター達の寝場所にもなるんだろう、一応、山の中で過ごし、3日目の朝のうちに下の平地に下り、迎えのジープは張りきって道は無いのだが無理矢理、かなり手前まで入ってくれて私の今回の登山活動は終了した。余談だが、帰路の水河の横断は羊達の踏み跡を忠実に辿った結果が良かったのだろう。途中でランチタイムを入れたのに3時間で通過する事が出来たのだった。位置としては登りの時よりはずっと下流を横断したのだ。

もうひとつ、今年(2015年)のパキスタンの外国隊の動向についてだが、イスラム国やタリバーン等の影響でもう警戒して全然来てないかと思えばそんな事は無く実の所バルトロ氷河方面には多数の隊が来ているとの事でナジール事務所のガイドは全員出払っている程だと言う事だった。これは帰国直前にナジール事務所に訪問した時、運よく1時間程会う事が出来たナジール氏の話だった。私が思うに確かにパキスタンは危ないがバルトロ氷河方面は対インド向けの軍隊がずうっと駐屯している事で比較的、安全であり地震で混乱しているネパールより有利と考えの結果なのだろうと考えた。

(日本隊は、ゼロとの事)

ナジール氏は「それなのに、治安の悪く、地震で出来た湖やらの不便なフンザの奥に入りたがった海老原さんはかなりクレージー」と嬉しそうに言う。

そう、この時期あのあたりで動いた隊は私達と、福岡山の会の高橋さん達2人の隊だけだったのだ。

ただ、私は今までに治安と不便と自分の貧乏に悩まない海外登山は(全部、パキスタンなのだが)行った事は無いのだ。だから面白いんじゃないか。(海老原 道夫 記)

作成参考資料:

ヒマラヤの高峰③(深田 久弥) 東部カラコルム・カシミール 白水社

ヒマラヤの高峰④(深田 久弥) 西部カラコルム・ヒンドゥクシュ 白水社

地球の歩き方 パキスタン ダイアモンド社

西南アジア地図(アフガニスタンとその周辺) 昭文社

Google map : (<https://www.google.co.jp/maps/>)